

法政大学中学校 国語  
2024年度第1回中学入試

問題文訂正

大問一 問題文 5ページ 上段 1行目  
誤 傍線部⑥  
↓  
正 傍線部⑦

二〇二四年度（令和六年度）

中学校第一回

入学試験問題

国語

注 意

左のことをよく読んで、**解答用紙**に解答を書きなさい。

- (ア) はじめに、受験番号と氏名を解答用紙（一枚）に書きなさい。
- (イ) 問題をよく読んで、解答用紙のきめられた場所に解答を書きなさい。  
（問題用紙に解答しても無効です）
- (ウ) 解答はこくはつきりと記入しなさい。
- (エ) 解答は解答らんからはみ出さず、ていねいに記入しなさい。
- (オ) 間違えた場合は、消しゴムできれいに消した上で、再度記入しなさい。
- (カ) 抜き出し問題などで特に指定がない場合は、句読点や記号は字数に数えます。
- (キ) 時間は五〇分です。
- (ク) 解答用紙はこの冊子にはさんであります。

※答えは、別紙の解答らん書き入れなさい。

# 一、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

冬休み帳を一日一日かくのが、麻子たちの宿題だった。

麻子は一ページが一日分の宿題をまとめてやってしまったのでのんきだったが、五年生になると問題もむずかしいので、至はまだ、しのこしていた。拓にいいさんのおさがりの机に向かつて、至は宿題を片づけなくてはならなかった。そして、拓にいいさんは至のそばにすわり、その勉強を監督した。にいいさんがいるだけで至はこちこちになり、問題が頭に入らなくなるらしかった。いつまでも同じようにしている至に、にいいさんはいらいらして鉛筆でこつこつ机をたたいたりした。

「どうだ。ここはこうじゃないか」

とうとう、説明しだし、「やってみる」とうながすのだが、至はだまっているだけだ。よるべない表情でなにかかきだが、すぐやめてしまう。

「わからないのか」

にいいさんの声が荒くなり、至はうつむいてしまう。頭をこづかれ、至は涙をすすりあげた。

みどりは横の机で、鉛筆ばかり削りながらときどき、にいいさんのほうをうかがい、麻子はお手玉をしながら、息をつめているのだった。あんな声をださなければいいのに、<sup>①</sup>小さいにいいさんだつて横にすわっていられたら、かえってわからないのかもしれないと麻子は思う。でも、こわくてとてもそう口にはだせないのだった。

にいいさんが中学から帰ってきたとき、子ども部屋ににいいさんの机はなかった。

「この机……」

拓にいいさんは自分の荷物をどしんと、机にぶつけた。それは<sup>②</sup>、至の本や帳面が積まれていた。おまえが使ってるのかと問われる前に、答えなくてはと、至はあわてて、

「かあさんが使っていたか……」

と、口ごもった。

「中に入ってただろう。おれの……」

至は引きだしをあけて、にいいさんのものだけ整理してつめられたものを見せた。

「拓ちゃん」

声を聞きつけて、奥からかあさんが顔をだした。

「それねえ」

と、かあさんは屈託のない声でいった。

「あんたはここにいないほうが多いのだから、至ちゃんにおさがりにしてやってね。内川へ来るとき、手伝いのおじさんとこにひとつ机をやってしまったの。ほんとうはもうすぐ保ちゃんもいるのだったけどね。荷物が多くてごたごたしたから。拓ちゃんは座敷のほうのテーブルで勉強してちょうだい」

「ああ」

拓にいいさんはちよつと眉根をよせた。

「拓ちゃんが中学へ入る前は大変だったね。みんなまだ小さくて、わあわあがやがやうるさくて、屏風でかこつて屏風の中で勉強してたねえ。そうだったんだよ、至ちゃん」

<sup>③</sup>申しわけなさそうに至がうなずき、拓にいいさんは目をそらした。

そして、にいいさんの机は、やはり、子ども部屋にはなかった。本箱にはにいいさんの好きな『子供の科学』や、原田三夫の星の本などのかわりに、『少年倶楽部』やのらくろの漫画や、妹たちのイソップや支那童話集やグリム童話の本がならんでいるのだ。にいいさんは子ども部屋に寝ころんで、英語のリーダーを読んだり、『少年倶楽部』をばらばらめくったりした。

ときどき、『番茶』と、みどりに命令したり、「至、スキーに行こう」と、とび起きたりした。また、あるときは、

「一本稽古つけてやるから、でろ」

と外へでて、棒切れの刀で剣道の型を見せ、

「ぞんぶんに打ちこんでこい」

とさげ、おずおず刀をかまえている至に打ちこませ、あとは、あべこべに、

「お面、お面、お面、お胴、お小手！」

と、息もつがさず打ちすえた。至は体をすくめ、顔をそむけて手向かうことさえできないでいた。

それは中学校で拓自身が上級生たちにやられていることを、そっくり演じているのかもしれない。だが、そんな光景は麻子たちを恐れさせた。麻子たちにも、拓にいいさんは至にいいさんにひどすぎると思われた。ときにはおとなしい至がかわいそうで、ときには④に見えて、はがゆかった。

「本箱を作るから、至、釘を持ってこい」

ある日、にいいさんは板片を切り、組み合わせて釘を打ちつけた。一方の端をおさえていた至を、おさえ方がわるいとなりつけ、雪の上に突き倒した。玄関の戸にころげて頭を打ち、どうした拍子か至は鼻血をだした。ふらりと起きあがった鼻から血が条をひいて、至は袖で顔をぬぐった。

「だめ、至ちゃん、上向かないと。あこちゃん、脱脂綿もらってきて。かあさんにいつてきてよ！」

みどりが至にかけよった。麻子がすくんだままおろしていると、「早く」とせかし、突然、拓にいいさんをにらんだ。

「ひどいよ。にいいさんは！」

みどりはにいいさんにむしゃぶりついて、向かっていった。

「弱いものいじめだ。至ちゃんばかりやつつけて！」

拓にいいさんの顔が燃えた。にいいさんはみどりの肩をなぐりつけ、首根っこを雪の上にぐいぐいと押しつけた。ほつたが雪でこすれ、みどりは泣くまいと顔をねじまげた。麻子は、勇敢なみどりに気おされ、自分もいっしょにとびかかって、みどりちゃんを救わなくてはと思うのに、足が動かないのだ。

みどりはにいいさんの手をはねのけ、いくどころがっては雪まみれになった顔でさげんだ。

「帰れ！ にいいさんなんか、豊原へ帰れ！」

……その日、拓にいいさんはひとりでスキーをはいてでかけたまま、いつまでも帰ってこなかった。

「内路の友だちのところへ行くといつてたけど、そういつてた？ にいいさん」  
かあさんは心配そうに麻子たちにたずねた。

「豊原へ帰ったかもしれないよ」

みどりは濃い眉を動かさずにいいきった。雪でこすった頬が赤くなっていた。

⑤ 麻子のみどりに感心し、それでも拓にいいさんがどこへ行ったか心配だった。

⑥ 麻子にいいさんがこわかった。

がっしりした大きな体と赤黒い顔を持つとうさんは、やはり、こわいひとだった。麻子の知らない部分のほうがあるかに多いこの男のひとは、だが、おとなの男のたのもしさを持ち、麻子には守られている安心があったのだ。だが、にいいさんはちがった。おとなと変わりないほど背ののびたにいいさんは、麻子たちにとつてもつとも親しい存在であるかと思えば、あるときは途方もなく遠いひとのように感じられた。ときとしてにいいさんをおそう憂鬱や、はげしい癪癢がとらえがかった。

拓にいいさんはほんとうに豊原へ帰ったのかもしれない。麻子は気になって保にたずねた。このちびの弟は、話し相手には幼すぎていつもはばかりにしているのだけれど、至やみどりに、なんだかたずねるのがはばかられた。

「へえ、なしてさ」

保はげんそうに問い返し、麻子は、

「あのう、あのう……」と、いっしょうけんめいで考える。そして、わかったと思う。

「あのね、寄宿舎の部屋には、十もベッドがあるといってたでしょ。机も本箱も十あるって。それでね、ここの子ども部屋には、にいいさんの机がないけど、あっちへ行けばあるんだよ。ちゃんと、にいいさんの机がひとり分」

そうにちがいがなかった。

風の音がしていた。ガラス戸が鳴り、ストーブの煙突がゆれて煤が舞い散った。

窓の外の裸の木々が激しくゆれている。日はもうク<sup>a</sup>れていた。

風に吹かれ、背の高い拓に九十五の坂を越え、白い雪原をひたすらすべっていくすがすがしい目にかんだ。⑦まるで活動写真の場面のように悲壮<sup>ひそう</sup>で、そしてもの悲しかった。もう、子ども部屋のひとつではない拓にいさんを、麻子は感じていた。

至が、門まででは帰りを待っていたにいさんは、夜になってやつと帰ってきた。紫色に凍<sup>こ</sup>えた顔をして、家に入ると、

「凍傷<sup>とうしょう</sup>になるよ。まあ、遅くなって」

かあさんはしかりつけ、すぐに熱いうどんを用意してやった。

「それで、今まで、そのお友だちのところにいたの」

「⑧—A。そいつ、十六日に帰るんだって。」

「だって、まだ冬休みはあるのに」

「⑧—C」

拓は頬<sup>ほ</sup>をこすりこすり、切れ長な一重<sup>ひとえまがた</sup>瞼の目でかあさんを見た。

「どうしてだい。おじいちゃんたちは本が好きで、詩をかいり絵をかいりしたというのに、うちにはちゃんとした本がなにもないなんて」

「そうだね。とうさんが好きじゃないから」

そうだった。かあさんはフイ<sup>b</sup>をつかれた顔になった。詩も小説も読ませてもらえず、活字といえど押入れの襖<sup>ふすま</sup>の下貼りのものさえ、むさぼり読んだ娘のころが思いだされた。とうさんが好きでないだけでなく、自分もそんなことは忘れていたのだ。かあさんは口をつぐんだ。

「友だちのそこには、すごい画集や文学全集を持つて家があるんだ。そいつの家には大学へ行つてにいさんがいて、そいつ、英語でも数学でもみんなの知らないことを知つてるよ……いいあんちゃんがいるんだなあ」

「いいあんちゃん？」

みどりが問い返した。

「そうだ。幹夫くんがいつてたろう。いいあんちゃんといっただろ」

⑨ 拓はことばをきり、思い返したように続けた。

「今夜な、星がすぐきれいなんだ。まるで北風がみがいたみたいだ。星のきらひかる下をスキーですべるのは、いい気持ちだよ」

拓にいさんは一月十六日、わが家を発<sup>た</sup>った。

c ミメイに馬櫓<sup>ばろ</sup>の用意がされ、この間と同じく湯たんぼの入った櫓<sup>ろ</sup>に、拓はふとんをかぶつてすわった。雪が激しく降りつけ、ふとんの上のすぐにつもった。

志尾さんが停車場まで送ることにになり、とうさんから細々と注意をうけていた。

「坊や、風邪<sup>かぜ</sup>をひかないようにね。舎監<sup>しゃかん</sup>の先生や室長さんによろしくいんだよ」

かあさんは櫓<sup>ろ</sup>をのぞきこみ、麻子たちはのびあがって、にいさんの顔を見ようとした。

「さよなら、にいさん」

「にいさん、さよなら」

d 至の声はボーイソプラノでうたう学芸会のドクシヨウのときのように、澄<sup>す</sup>んで泣いているようにふるえていた。かあさんの背から保がどなった。

「また、おみやげ持ってくるんだよ。にいさん」

櫓<sup>ろ</sup>の中から、にいさんは、「おう」と答え、「元気でな」と、手をふった。⑩ \*さつき

の防寒着の具合をなおしたり、櫓<sup>ろ</sup>の調子をしらべたりしていたとうさんは最後に

拓をのぞきこんだ。

「がんばれよ、拓」

「あ」と、ふとんから顔をだしかけた拓の上に、ふとんをひっぱってかぶせてやつた。早くもふとんにつもっていた雪が、さらさらとこぼれた。

そして、櫓<sup>ろ</sup>は動きだし、降りしきる雪の中を鈴の音とともに遠ざかっていった。

\*皐月<sup>さつき</sup>：馬櫓<sup>ばろ</sup>をひく馬の名前。

(神沢利子「流れのほとり」より)

問一 ― 部①「小さいにいさん」とは誰のことですか。その人物として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 保 イ 至 ウ 拓 エ 幹夫

問二 ②に入る一節として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア みんなで使う共同の机だから  
イ おじさんのとこにやってしまった机なのに  
ウ この間まで拓の使っていた机なのに  
エ 新しく買ってもらった机だから

問三 ― 部③「申しわけなさそうに至がうなずき」とありますが、どうしてですか。その理由として適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 拓が中学に入学する前に子ども部屋で勉強しているとき、うるさくしていたのが至自身だったから。  
イ 拓がこれまで使っていた机を、本人が知らないうちに至が譲り受けてしまっていたから。  
ウ 至は、机の中に入っている拓の私物をどの様に扱えばいいのか分からず、気まずかったから。  
エ 至は子ども部屋に居場所がない拓をじやまに思っているという気持ちをかくしたかったから。

問四 ④に入る言葉として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア どんかん イ のんき ウ いくじなし エ 神経質

問五 ― 部⑤「麻子のみどりに感心し」とありますが、みどりのどのようなところに感心したのですか。その内容として適切なものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 拓に肩をなぐりつけられ、首根っこを雪の上にぐいぐいと押しつけられたのに、至のことを心配しているところ。  
イ 拓に「豊原へ帰れ」といったことが原因で帰ったかもしれないのに、動揺もせず「豊原へ帰ったかもしれないよ」といいきったところ。  
ウ 至にひどいことをした拓をにらみつけ、「ひどいよ。にいさんは！」とどなりながら、兄に立ち向かっていったところ。  
エ 拓にやられてしまい鼻から血を流している至を助けるとともに、子ども部屋の兄の居場所を奪ってみせたところ。

問六 ― 部⑥「麻子にはいさんがこわかった」とありますが、どのようなところがこわいのですか。とうさんのこわさと対比して六〇字以内で説明しなさい。

問七 ― 部⑥「まるで活動写真の場面のように悲壮で、そしてもの悲しかった」

とは、麻子はいさんの状況をどのように感じていることを表していますか。  
適切なものには○、適切でないものには×をそれぞれ答えなさい。

ア 今まで同じ場所にいたにさんが遠い存在になってしまったさみしさ。  
イ 子ども部屋では怖い存在だったにさんがいなくなることへの解放感。  
ウ 子ども部屋に居場所がなくなり広い世界に出て行くにさんの孤独感。  
エ 今までとちがう敵ばかりの環境に身を置くことになるにさんの恐怖。

問八

⑧―A ― ⑧―C にあてはまる次の文を正しい順に並びかえて記号で答えなさい。

ア ばくもそうすることにしたよ

イ ああ、泊まってけといわれたけど帰ってきた

ウ 本が読みたくなかったし

問九 ― 部⑨「拓はことばをきり、思い返したように続けた」という拓の行動

にはどういう意味があるのですか。内容をまとめた次の文章の [A] に  
[D] にあてはまる言葉を ( ) 内の指定の字数で答えなさい。ただし、  
入る言葉が本文中にあるとは限りません。

兄弟げんかの後、友人宅に出かけていた拓は、帰ってきて、自分の家とはちがって本がたくさんあるその家の様子を話した。友人には [A (二字)] に行っている兄さんがいて、みんなの [B (六字)] を教えてくれることを拓はうらやましがるが、妹に「[C (八字)] 」と聞き返され、自分がよい兄ではなかったことを思うと言葉が続かない。しかし、友人宅からの帰り道で冷静に自分を見つめる時間を持てた拓は、その時見た光景や自分の体験を [D (二字)] な気持ちで弟妹に話すことができたのだった。

問十 ― 部 a ～ d のカタカナを漢字で書きなさい。

a クレ      b フイ      c ミメイ      d ドクショウ

## 二、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

言葉は何のためにあるのか？

言葉は、誰もが、目や手や脚のように毎日使っているものだから、何のためにあるかと聞かれても戸惑ってしまうかもしれない。でも、一度このことをじっくり考える機会を持ったほうがいい。じっくり考えるのが面倒くさかったら、一日誰とも話さず、独り言もいわずに過ごしてみるといい。どんなに退屈で、不便で、寂しいか、よくわかるから。

人は言葉から完全に離れて暮らすことはできない。君の目や耳には言葉が絶えず流れ込んでくるし、頭の中で何かを考えることをやめられない。君は眠っているあいだも言葉を使っている。夢の中の君や友達はしきりに何事かを話しているだろう。十九世紀のドイツの話だ。全く言葉を知らず、誰とも話したことがない人がいた。

彼はカスパー・ハウザーと呼ばれたが、I、その名前は後からつけられたもので、最初は名前もなかった。生まれてから、ずっと家の牢屋ろうやに閉じ込められていて、誰とも話したことがなかった。ある日、彼はその家から外の世界へと出ていった。満足に歩くことさえできなかった。村の人はその異様な風体の青年に話しかけたが、全く言葉は通じない。外国人かと思ったが、ただうめき声を上げるだけで、一切の言葉を知らないことがわかった。一人の博士が彼に興味を持った。この青年に言葉を教えれば、文明人と同じ生活ができるようになるか、試してみようと思った。博士の教育は、少しずつ効果を上げ、カスパー・ハウザーはドイツ語を話し、社会的な生活ができるようになった。さて、この場合は博士を誉めるべきか、カスパーを誉めるべきか？二人の関係は赤ん坊と親の関係に似ている。誰しも自分の言葉が通じない世界では、カスパー・ハウザーと同じ道を辿ることになる。博士のようないい教師にめぐり合える保証はないけれども、すでに母の舌を持っている君はカスパーよりも早く、新たな環境に慣れることがで

きるはずだ。

旧約聖書には、バベルの塔の話が書いてある。

天国まで届く高い塔を建設しようとした人間の傲慢ごうまんを戒めるために、神は何をしたか？人々が話していた言葉をバラバラにして、通じなくさせた。そのため、互いに考えていることがわからなくなり、塔の建設は途中で放棄された。この時から、世界には無数の言語が生まれたことになっている。バベルの塔の建設もそうだが、何か大きな事業を行う時、たとえば、国を作るとか、戦争をするとか、川をせき止めたりする時は、共通の言語を持っていなければ、作業は進まない。きつと、万里の長城やピラミッドを作った時も、支配者は言葉を統一することから始めなければならなかっただろう。

君はこう考えたことはないか？

世界中の人がみんな同じ言葉で話せたらいいのにな。私も外国でなかなか自分のいうことが通じない時など、外国語が恨めしく思う時がある。でも、世界には無数の言葉があった方がいいと思いたくはない。 II、言葉が同じなら、誰もが同じようなことしか考えられなくなるからだ。自分と似たことをいったり、やったりする奴が世界に何万人もいたら、自分なんてこの世にいたって済むではないか。 ②人と違う言葉を話す……それ自体が価値を生むのだ。

たとえば、日本語の「幸せ」に当たる言葉は、英語ではハッピーといい、ロシア語ではスチャースチエという。 III、その単語を発音しても、幸せのニュアンスは伝わらない。ハッピーは a何処か快樂と結びつく感じがし、スチャースチエは神に願いをかなえられた感じが、幸せは慎ましく、ほのぼのとした願いといった感がある。このズレこそがコミュニケーションの楽しみである。

私は外国語を話すのが好きだ。

初めは君の耳に全く無意味な音の連なり<sup>b</sup>としか聞こえない外国語も、実際に使ってみると、相手に通じるばかりか、特定の反応を示してくれる。

英語を流暢に話す人も、フランス語が得意な人も、最初は恐る恐る使ってみて、少しずつ慣れてゆくものなのだ。言葉が違えば、考え方も違う。人は外国語を学ぶたびに、新たなものの考え方や、ものの見方をも学ぶ。外国語学習の第一歩は、子どものようになって、その言葉で使われている文字や音に慣れることから始まる。それは二度三度と子どもに戻るレッスンになる。そして、気づいてみれば、君は複数のものの考え方やものの見方を身につけている。

世界に無数の言葉が生まれたからこそ、その言葉を使って何かをやってみよう、自分の言葉と他人の言葉を交換してみようと、人々は考えた。言葉が通じなくても、人は諦めず、神の試練を受け容れて、より巧みに言葉を利用するようになったのだ。こうして、文明が生まれる。文明というのは、異質な言葉や考えが流れ込んでくる場所で栄えるものだ。古代ギリシャのアテネはそういう都市だった。古代ギリシャ人は言葉を書き記す文字を持っていた。文字さえあれば、たとえ何処の言葉であろうと、表現できるし、習うこともできるようになる。文字は言葉を物のように扱えるようにする道具だ。古代ギリシャ人は自ら発明した文字を使って、周辺地域からもたらされるとっておきの情報を集め、それらをまとめて自分たちのものにした。

Ⅳ、彼らは文字を使って、共通の言葉を作ろうとした。その結果、生まれたのが、文学であり、哲学であり、歴史であった。

④ 文明の生まれるところには必ず文字があった。中国やインドで文明が栄えていた頃、まだ日本なんて国はなく、私たちが今使っているような文字もなかった。当然、文学も哲学も歴史もなかった。ようやく、仏教が伝来する頃に、漢字が入ってくる。私たちが使っている日本語の文字は、その漢字をアレンジしたものだ。文字が入ってくるのと同時に哲学や歴史がもたらされた。日本のルーツは主に中国にあり、中国との関係が文字に記録されるようになってから、ようやく日本は歴史の中に現れてくるのだ。今から数千年前の縄文時代から、日本という国があったなどと思っ**て**はいけない。

ここで君に知っておいてもらいたいのは、言葉、そして文字がなければ、歴史も国家も消えてなくなってしまうということだ。

## 言葉は交換される

もう一度、<sup>⑥</sup> か、考えてみよう。君は普段どのように言葉を利用しているだろうか？

言葉を使えるお陰で君は退屈を紛らすことができるし、人を好きになることができるし、未知のものを知ることができる。それだけではない。言葉の使い方によっては、人を救うこともできるし、元気にすることもできる。逆に人を騙したり、怯えさせたり、絶望させたり、殺したりもできる。もちろん、言葉の代わりにナイフを使って人を殺すこともできるし、筋肉を使って人を励ますこともできるが、ナイフで歴史を語ることはできないし、筋肉で嘘をつくことはできない。ではここで質問。文明や国家や歴史も作ってしまう言葉に、よく似ているものがあるとするば、それは何だろうか？ ヒントをあげよう。君がふだんよく使っていて、もつとたくさんあればいいな、と思っているものだ。

答えは、お金。そう、言葉は**金**に似ている。たとえば、こんな類似点がある。お金があれば、もてない男ももてるようになる。言葉をうまく使えば、もてない男ももてるようになる。お金を使えば、醜い女も美しくなる。醜い女も言葉を変えれば、美しくなる。お金を払えば、罪を犯しても、罰を受けずに済む。罪を犯しても、言葉で言い逃れをすることができる。

お金も言葉もその人の本性を隠してしまうのだ。悪人も、お金の力や言葉の魔術で、善人に化けられる。人間は、お金と言葉を、そういうものとして使ってきたのだ。

お金はそれ自体、ただの紙だが、何かと交換することで無限の価値を生む。言葉はそれ自体、ただの音や記号だが、誰かと話すことで無限の価値を生む。お金も言葉も、その価値は絶えず変わり続ける。お金も言葉も、価値が下がったり、上がった**り**するが、それは交換されることで価値を生むものだからだ。もともと、

この二つのものは実体も本質も持たない。いつも関係の中で自分を作りかえるものなのだ。場所や時間によって、価格が変わるように、言葉も相手や場所で意味やニュアンスが変わる。

場所が変われば、お金も言葉もその土地独自のものになる点も似ている。アメリカでは英語を話し、ドルを使う。英語もドルも世界中で使える共通のお金であり、言葉だ。一方、インドではヒンディー語を始めたくさんの言葉と、ルビーというお金を使っている。ドルのように何処でも使える強いお金もあれば、ルピーのようにインド以外ではあまり使えない弱いお金もある。それと同じで、英語は何処でも通じるが、ヒンディー語となると、そうはいかない。

君に知ってもらいたいのは、お金も言葉もその都度、交換価値が決められるということだ。英語のように交換価値が高い言葉は強い言葉ということになる。お金の強さと言葉の強さは深い関係がある。母親から習った言葉が弱い言葉だと、狭い世界でしか通じないので、その人は強い言葉を学ばなければ、広い世界に出て行けない。日本はどうだろう。日本円はなかなか強いお金だし、日本語は昔に較べると、ずっと通じやすくなった。でも、そのことに甘えてはいけない。お金や言葉が強くなると、人は傲慢になり、⑦に陥る。あまり、強いお金と言葉の力に頼りすぎると、自分が本来持っていた能力を失ってしまうばかりか、弱いお金や言葉を見下すようになってしまう。

もう一度いおう。お金と言葉は君の本質や実体を見えにくくし、幻想ばかりを募らせる。お金や言葉に騙されてはならない。

どんなところに行っても、お金と言葉は人々を社会と結びつける役目をしている。私たちは、いやでもお金と言葉にかかわりを持たされている。君たちが将来、何らかの仕事につくとして、お金や言葉と全く関係のない仕事があるだろうか？政治家も弁護士も、教師も銀行員も、小説家もジャーナリストも、軍人も機械工も、あらゆる仕事は言葉をめぐってなされる。政策も法律も教科書も他人を納得させるための言葉で書かれるし、為替や株も言葉の情報で上がったたり、下がった

りするし、小説も報道も言葉で作られた物語だし、作戦も取扱説明書も言葉でできている。職業というのは言葉の使い方で分類できるものだ。たとえば、哲学の言葉は誰にでもわかるというものではない。それこそ外国語を学ぶように哲学用語を学ばなければ、カントやマルクスの話は通じない。機械音痴の人にいくら、コンピューターの専門用語を使っても通じない。

人はそれぞれの分野で言葉の専門家になっている。そして、特定の情報を独占して、お金を稼いでいる。政治家同士の密約、法律の複雑な解釈、市場の値動きの変化、特ダネ、とっておきのテーマ、秘密作戦、特許などはどれも言葉の形で取引される商品だ。

君がここで知っておくべきなのは、言葉は社会の中で商品のように扱われているということだ。人は誰しも多かれ少なかれ、⑨。

(島田雅彦「言葉とは何か」より)

問一——部①「塔の建設は途中で放棄された」のはなぜですか。その理由として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 人間の神をも冒瀆する傲慢さに対し神が怒りを感じ、それを戒めたことが旧約聖書に書かれているから。

イ バベルの塔を建設する支配者が、言葉を統一するためには他言語の学習から始めなければならなかったから。

ウ 神の力によって共通の言語がなくなっただけで、指示が通らなくなり建設作業は進まなくなったから。

エ バベルの塔の建設が神の聖域に触れてしまうということに気づいた人間たちが、建設をためらったから。

問二 — 部②「人と違う言葉を話す……それ自体が価値を生むのだ」とはどのようなことですか。その内容として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 文化が違っても共通言語によって他の文化を理解しあえるということ。
- イ 言葉は単一ではなく、無数である方が考え方が多様になるということ。
- ウ 言葉が違えば言葉の使い方によって、人を励ましたりできるということ。
- エ 話している言葉が同じでも、習慣が違えば個性が生まれるということ。

問三 ③ にあてはまる次の文を正しい順に並びかえて記号で答えなさい。

ア あるいは、フィンランドのラップランドで、ハウスカ・トゥトウストウア  
たとえば、サーミは喜んで君を家に迎え入れてくれるだろう。

イ たとえば、ケニアのサバンナでマサイの人にアサンテ・サーナといえば、  
カリブーと返事が返ってくる。ありがとう、どういたしまして、という意味  
だ。

ウ それはお会いできて嬉しいです、という意味になる。

問四 — 部④「文明の生まれるところには必ず文字があった」とありますが、  
どういうことですか。文明と文字の関係がわかるように、六〇字以内で説明  
しなさい。

問五 — 部⑤「言葉、そして文字がなければ、歴史も国家も消えてなくなってしまう」とはどういうことですか。その説明として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 文字を使って共通の言葉を作り、文学や哲学や歴史を誕生させなければならなかったということ。

イ 日本のルーツは主に中国にあり、中国との関係がなければ日本語は成立しなかったということ。

ウ 日本語の文字は漢字をアレンジしたものであり、日本独自の本当の哲学や歴史はないということ。

エ 文字によって、記録されるようになってから、ようやく国家は歴史の中に現れてくるということ。

問六 ⑥ に入る言葉を本文中から一〇字で書きぬいて答えなさい。

問七 ⑦ にあてはまる四字熟語として最も適切なものを次の中から選び、  
記号で答えなさい。

- ア 自己嫌悪    イ 自己満足    ウ 自己弁護    エ 自己矛盾

問八 ―― 部⑧「お金と言葉は君の本質や実体を見えにくくし、幻想ばかりを募らせる」とはどういうことですか。内容をまとめた次の文章を読み、A D にあてはまる適切な言葉をそれぞれ本文中から二字で書きぬいて答えなさい。

お金があれば、もてない男ももてるようになる。言葉をうまく使えば、もてない男ももてるようになるというようにお金も言葉もその人の本性を隠してしまう。また、お金はそれ自体、紙だが、何かとA すること無限のB を生む。言葉はそれ自体、ただの音や記号だが、誰かとC ことで無限のB を生む。この二つのものは実体も本質も持たない。いつもD の中で自分を作りかえるものであるということ。

問九 ⑨ にあてはまる言葉として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 言葉で騙されて買わされるものなのだ
- イ 言葉を特定化して独占するものなのだ
- ウ 言葉売って生きて行くものなのだ
- エ 言葉で分野に分けて専門化するものなのだ

問十 次のI からIV にあてはまる語として最も適切なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- ア つまり
- イ もちろん
- ウ しかし
- エ なぜなら

問十一 ―― 部 a d の漢字の読みをひらがなで書きなさい。

a 何処      b 連なり      c 類似      d 都度





\_\_\_\_\_▲

\_\_\_\_\_▲

点

点

点

点

点

点

点

点

点

点

|      |
|------|
| 合計点数 |
|------|

※受験番号は算用数字で記入し、漢数字では記入しないこと